



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	個人としてのアメリカ農民の行動
Author(s)	アンダーウッド, F.L.
Citation	季刊農業経営研究, 4, 4-6
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36265
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_4-6.pdf



個人としてのアメリカ農民の行動

F. L. アンダーウッド

外見はアメリカ農民を特徴づけない。他の人と同じに見える。人の中にいる時は、農民は他の人と同じようによい服装をし、きれいにひげをそり、銀行家のように、実業家のように、はた又教授のように威厳がある。

その言葉も又特に農民特有といったものでない。その言葉の使い方は、あるいは、教授のそれより単純であるかも知れぬが、同じように正鵠であることが多い。その会話の内容さえ、他の市民たちのそれと同じであるかも知れぬ。ただ仕事の話をするときのみ、その用語がその職業を示すことになる。

交通の仕方——農民が乗る車——も必ずしもその職業に特有のものでない。日曜あるいは祭日に駐車場に集っている自動車の中から農民の自動車を全部それだけとりだすことはむづかしい。事実、農民の自動車は教授の自動車よりよい自動車であり、最近型であるかも知れぬ。農民は、自動車を自分の仕事に使うが故に、よい自動車を必要とするのだ。

農民は互にそれぞれちがつている。しかし、そのちがいはアメリカの他の職業群の人達の間におけるちがいと同じである。ある点では、アメリカ農民は他国の農民と似ている。しかし、農業の仕方において今日の世界の他国の農民と著しくちがった面をもっている。恐らく、これらのちがいのあるものは、ここに述べるアメリカ農民の特質の簡単な記述から明らかになる。

まず最初に、アメリカの農民は労働者である。全体として、アメリカの農民は、恐らく、世界の他の農民よりもつと多くの仕事をする。農民とその家族がアメリカの農場で使われる全労働力の4分の3を占めている。一農場平均の雇傭労働量は、年0.5人にみたない。アメリカの農場でなければならぬ仕事は尨大な量にな

るが、その4分の1以下が雇傭労働者の手でなされる。この割合は、過去45年間殆んど変つてない。

労働は農場の生産費目のうちで最も大きなものの一つである。多くの農民は労働の雇傭という面で都市の産業のそれとたちうちできない。ともかく、かかる高い費目は能率的に使わねばならぬ。農場間の経済的成功の度合の差は、作物の収量あるいは家畜の生産の度合の差よりも労働能率の差に基づくことが多い。高価な雇傭労働をできるだけ少く使つて仕事をするために、農民は機械やその他の作業具を使わざるを得ない。そうでなければ、自分自分の家族の生活程度を下げざるをえないわけである。後者を選ぶことは、自己の受くべき労賃をひきさげることになる。もし自己の労賃が充分のものでなくなるなら、農民は農業をやめて都会で職を求めることができる。過去の多くの農民は実際そうしたのである。しかし居残つて農業を続けた者は作業を果すために機械工具を使用することを余儀なくされた。然らずんば、低い所得水準に甘んぜざるを得なかつたわけである。その結果、機械をうまく使うことのできなかつた農場は放棄され、もはや農場として運営されてない。これらの農場を続けて運営すれば、年間の費用が年々の生産価値をオーバーすることになる。

第二に、アメリカの農民は資本家である。それは最初からそうだったのである。最初の人から森から枝をとつてきて、それを地面を掘るに使つた時以来、農民は資本家であつた。作業を果すため道具、機械その他の工具を使わざるを得なくなつて、農民は以前よりも一層強く資本家的性格を強くするようになった。進歩的な農民は、毎日、もつと多くの仕事をし、あるいは一層よく仕事をするため新しい機械を発見しある

いは工夫しようと努めている。多くの近代的な農業機械のはじまりは、特別な補助なしに仕事をする必要に迫られたある種の人の農場からであつた。製造業者達はこういつた発展に追従し、かつ、できうべくんば、新しい機械や新型のもので、こういつた動きに先んずることがよい商売になることを見出したのである。

土地所有は農業における資本主義の唯一の徴表でない。アメリカの農民も日本の農民も殆んど同じ位の割合で自作農である。パーセントでいえば、北海道のそれはアメリカよりやや高く、内地ではやや低い。農業における資本主義の重要な側面はあらゆる生産手段、すなわち、土地のみならず、機械、家畜、その他の資本を所有し、支配するということである。1956年においてアメリカの農場で生産に用いられたあらゆる資産の従業者一人当りの平均価額は15,163ドルである。そのうち、71.2%が土地並びに建物、11.5%が機械、17.3%が「その他資本」である。アメリカ農業は機械化しているという定評にもかからず、家畜、飼料、資材などを含む「その他資本」の種別が機械資本の部分の1.5倍に達していることは、恐らく、注意に値する。土地以外の資本は一農場あたり7,500ドルになる。しかし不動産は土地資本に包含さるべきである。何となれば、小作農場においても、農業者が、實際上、その賃借期間は土地の全支配権をもっているからである。かかる理由からして、アメリカの農民は、単なる土地所有者ではなく、資本家であるというのである。

第三に、アメリカの農民は経営者である。このことは多くのことを意味している。確かに、農民は自分で自分を雇っている。農民は自分の主人公であるから、自己の欲することを行うことができる。もし働こうと欲するなら、そうする特権をもっている。もし町に行こうと思うなら、そうすることができる。そして町に行っている間に、今迄の仕方より一層よくあるいは早く作業のできる新機械を発見するかも知れない。あるいは又、自分が欲するなら休むこともできる。誰もこれに干渉しない。農民は自分で自己のことについて決断する。そしてもし誰かがこれこれのことをしなさいと差出口をいおう

とするなら恐らく憤慨するだろう。農民は自分自らの農業政策たてるのである。

このことはまことに無碍な自由に見える。しかし例外が一つある（このことについては後に述べる）。ところで農民の計画樹立には余人は誰も参加しないのだから、彼自らがその結果に対し責任をとる。もし決断が賢明で成功するなら、まずその利益を自らの手に収めることを期待する。愚な決断をやり損をするなら、その損失は自ら背負う覚悟である。確かに、彼の決断に参加しない者は誰もその損失を背負おうとはしない。成功しようという期待が彼を駆つて最善をつくし、手にいれうる最良の知識を利用させるのである。失敗へのおそれが彼を注意深くさせ勤勉ならしむる。

このアメリカ農民の自己の経営の経営者としての地位は更に深甚な結果をもたらしている。すなわち、農民は毎日、毎年、自ら決断を下すことによってその主たる生産の領域を発展させ、技術を前進させ、その経営の規模を拡大させた。かくするに当つては、農民は土地あるいはその他の物資及び役務を各自に自由に賃借し、売買し、又多くの調整をなしたわけである。重要なアメリカ農業の調整の大部分は、農民自身によつて、その誰にも制肘されない自前の決断によつて自発的になされたものである。それ以外の農業調整の仕方というものは通常なものでないから、ニュースと考えられ、世界中の新聞紙に報道されたのである。

この種の独立的な農業経営には多くの思考と計画とを必要とする。多くの農場は機械化しているけれども、今日のアメリカの農場で最も大切な道具といえば鉛筆である。頭脳の力はトラクターの動力あるいは人間労働より更に重要である。農民は多くの漸新な報道を必要とする。政府の最も役に立つ機能の一つはかかる報道や知識を無料で流すことである。農民はそれを利用することも出来るし拒否することもできる。進歩的農民は、穀物、土壤、家畜、農業工学、及び市場に関する漸新な報道の利用法を知っている筈である。農民にものの考え方——如何に報道や知識を組合せ、自分の問題の解決に役立てるか——を教える教育的訓練は極めて重要で

ある。

大部分のアメリカの農場は家族農場である。家族が大部分の仕事をし、家族が生産手段を所有しあるいは支配し、家族が自ら決断し、その結果に対し責任をとる。1パーセント弱の農場が雇傭経営者を使っている。ある州では、共同経営は法で禁止されている。

賢明な決断をなすことによつてそこから生ずる利益を享受するという期待が、農民を駆つて、最善の努力をはらわせるのである。農民は自分の決断の結果を背負わねばならぬのであるから愚かな決断をしようとはしない。決断をなす自由、そしてその結果に対する責任を負うという、自由と責任の概念は農民によって育まれたものである。農民はかかる特権を自分自身のために、はたまた、他の人のために擁護しようとする。もしかかる特権がきびしい制限や統制でとり除かれるなら、自発力は弱体化するだろう。そして陳腐旧式な方法がそのまま踏襲されることになろうし、一層多くの人口が農業のために必要になつてこよう。そして他の仕事に従事しうる人口の割合はごく少くなり、人々の生活程度は低下するであろう。

アメリカと日本の農民とではその生産物の種類、技術、その他多くの点でちがつているけれども、似ている点もある。ここで用いた意味において、両者共、ある程度、労働者であり、資本家であり、かつ経営者である。しかし、日本の農業に生産物の種類や技術のみならず他の色々な面で、アメリカのそれとはちがつている。若干のこれらのちがいを次回に論及しようと思う。(北大交換教授・農業経営専攻)

季刊 農業経営研究

第1集目次

農業経営の考え方	矢島武
酪農経営の基礎と課題	桃野作次郎
水稻品種作付比率の決定法	京野禎一
北海道農業に於ける資本形成の特徴	飯島源次郎
北海道農業に於ける農家の消費構造	清水川敏雄
北海道農家の消費構造分析のために	今泉英男
越後地主と北越殖民社Ⅰ	山本敏
農産物の商品化について	川村琢
ジャージー牛の故郷	山口哲夫
アメリカ農業経営学	和泉庫四郎
・特別寄稿・	
矢島武 滞欧通信	ドイツ農業の方向

第2集目次

アメリカ農業経済学会	矢島武
甜菜栽培と農業経営	桃野作次郎
乳牛経験の五ヶ年	厚海忠夫・近藤邦広
根室原野の酪農経営	杉上忠幸
戦後北海道酪農経営の動向	塩沢俊俣
農業機械化に関する一考察	七戸長生
越後地主と北越殖民社Ⅱ	山本敏
・研究手帳・	
農業機械化の速度	渡辺侃
北海道馬鈴薯の始まり	高倉新一郎
農業技術の経営的普及	堀口逸雄
甜菜奨励今昔	吉田博
小農機械について	渡辺以智四郎

第3集目次

農業の経済的調整の基礎	J. L. Buck
農業経営の動態的把握に関する序論的考察	七戸長生
北海道農業確立期(明治30年代)以前における農作物事情	榎勇
北海道稲作経営の安定化条件	桃野作次郎
北海道農家の経済力水準と租税公課	
諸負担の地域的関連	黒柳俊雄
最近に於ける青森りんごの生産費について	須藤友四郎
アメリカ農業経営学(その生成及び発展の過程と特質)	和泉庫四郎
・研究手帳・	
景気循環と農業簿記	渡辺侃
農業経営と市場取引	川村琢
水と農業経営	井上実
適期	金沢夏樹
総合農学について	工藤元